-	
Title	
Sub Title	General Equilibrium System and Monetary Theory
Author	田村, 茂(Tamura, Shigeru)
Publisher	
Publication year	1958
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.1, No.2 (1958. 6) ,p.62- 77
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of the monetary theory represented by the equation of Cash-Balance-or Transaction type is to explain the determination of the price level or money, prices. This monetary theory can give a complete explanation of pricing process in a monetary economy when it is taken together with the classical general equilibrium theory which explains the determination of relative prices. The monetary theory like this is really invalid. Why is it so? What monetary theory is valid? And what is the condition for constructing the valid monetary theory? It is the purpose of this paper to investigate these problems. We start with examining the classical system in order to know what role monetary theory plays in it. Consequently, we find out the following. The general system of equilibrium equations in the classical system is able to determine only relative prices. One more equation is needed to transform them into money prices. Monetary theory is considered as what provides it. Thus, an equation devised by such a monetary theory is Cash-Balance or Transaction equation. The property of this monetary theory, therefore, is called "complementary property". Monetary theory characterized with "complementary property" was criticized by J. R. Hicks and P. N. Rosenstein-Rodan in 1930's. Their criticisms were based upon a notion that uncertainty was the only factor which gave rise to demand for money to hold. According to this notion, there is no demand for money under static or stationary assumptions on which the classical system is set up. It is clear that monetary theory, con sistent with those assumptions can not give a meaningful equation. But A. W. Marget, scon after Hicks, proposed a problem as to possibility of static monetary theory, worked out a factor explaining demand for money in static economy, and it hasbeen recently named "time factor" by J. C. Gilbert. Time factor is a lack of synchronization between this means that any complementary, monetary system spliced on the classical system is invalid. Criticisms from this
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-19580630-04043407

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の貨幣経済に対する非妥当性はパティンキン論争の中で再確認され	その点から F・N・F	うではないということで	換経済についてはその妥当性を認められてはいるが、貨幣経済につ	における価値の全体系の決定を取扱う古典的一般均衡理論は物々交	ティンキン論争の過程で明らかにされたことは、経済の静学的均衡	一九四〇年代の終りから五〇年代の初めにかけて行われた所謂パ			、むすび	四、二分法の破棄	三、静学体系における貨幣需要	二、古典的体系と貨幣理論	一、はしがき	· · ·		一般世後好系と貨幣理
程でD・パティンキン、K・ブルンナーによって明らかにされたのは、	る相対価格の理論に対し補完的意味をもつ。パティンキン論争の過復てとられる古典的分析によれに「貨幣理論に身を存所の理論であ	めづけってる ちもりかけこと しず、 賢啓里侖よ毛勿本系の 里魚で らるのが貨幣理論であると考えられている。従って二分法によって特	るだけのものであって、この変換のために必要なメカニズムを与え	の決定は、実は実物体系で決定された相対価格を貨幣価格に変換す	を説明せんとするものである。けれども貨幣体系における貨幣価格	け、前者において相対価格の決定を、後者において貨幣価格の決定	は二分法と名付けられ、貨幣経済を "実物" と "貨幣"の二体系に分	いう観点から問題がとり上げられたのである。古典理論の分析方法	で古典理論の分析方法が貨幣経済の均衡分析として是認し得ないと	たのに対し、パティンキン論争においては右の問題が解決された上	幣経済が論理的に不可能であるという観点から問題がとり上げられ	・ しかしヒックス、ローゼンシュタイン-ロダンにあっては静学的貨	たという方が適切であろう。	7	田 时 、 天	

.

六二

• ,

	一般均衡体系と貨幣理論、
	Money", The Review of Economic Studies, Vol. 18
二—四七頁。	Reconsideration of the General Equilibrium Theory of
今川 正 二分法と絶対価格『経済論叢』第七一巻第三号 11	Theory", Econometrica, April 1951, pp. 135-51; "A
三〇七一三三二頁。	1949, pp. 1–27; "The Invalidity of Classical Monetary
久武雅夫 実物体系と貨幣体系『一橋論叢』第二八巻第三号	Classical Economic Theory", Econometrica, January
にとくに関連をもっているのは左の三つである。	135-54; "The Indeterminacy of Absolute Prices in
ンキン論争について発表されているが、我々がとり上げる問題	Demand for Money", Econometrica, April 1948, pp.
35576 がある。 我が学界においてもいくつかの論文がパティ	D. Patinkin: "Relative Prices, Say's Law and the
Discussion" Economica, Vol. 19 (1952) No. 76, pp.	(註1) この論争に関係のある主な論文は左の通りである。
"The Classical Monetary Theory: The Outcome of	
中間展望を行ったものには G.S. Becker & W.J. Baumol:	一般均衡理論を意味することに注意されたい。
Prices'", Econometrica, January 1950, pp. 25-26;	たいと思うものである。以下用いられる『古典理論』は凡て静学的
21-24; C. G. Phipps: "A Note on Patinkin's 'Relative	に修正された体系はどのような含意を有するかについて検討してみ
Money and Prices", Econometrica, January 1950, pp.	を克服するには、一般体系がどのように修正さるべきであるか、更
Leontief: "The Consistency of Classical Theory of	整理しつつ、補完的貨幣理論の蒙むる困難を明らかにし、その困難
Theory", Econometrica, January 1950, pp. 9-20; W.	いる。そこで我々は本稿において、パティンキン論争中の諸貢献を
Determinacy of Absolute Prices in Classical Economic	貨幣の一般均衡理論に更めて考察を加える必要のあることを示して
rica, April 1951, pp. 152-73; W. B. Hickman: "The	の一部として矛盾を含むか、あるいは無意味であるということは、
and Indeterminacy in Classical Economics", Economet-	表される最も親しまれてきた貨幣理論であり、これが一般均衡体系
(1954) No. 82 pp. 113-28; K. Brunner:"Inconsistency	る。補完的貨幣理論は現金残高方程式、あるいは、交換方程式で代
Process in Economic Theory", Economica Vol. 21	貨幣価格の決定という自らに課せられた使命を果し得ないことであ
(1950-51) pp. 42-62; "Dichotomies of the Pricing	かかる補完的貨幣理論は矛盾を含むか、それを回避しようとすれば

表

る

貨

八七——一五頁。	と考えよう。この経済に存在する個人の数をmとするが、いま期首
راس من	n)、期間中彼が需要し消費する該財の量を Zea(i=1, 2,, n-1)、において α番目の個人 の 手中に あるす財の量を Zea(i=1, 2,,
(1933) ss. 441-55.	該財の価格を pィ(i=1,2,,n-1) とする。 いうまでもなく、
(拙 $)$ P. N. Rosenstein-Rodan : "The Coordination of	$Z_{\iota a}(i=1,2,,n-1)$ は与えられた量であり、 $p_{\iota}(i=1,2,,n)$
the General Theories of Money and Price," Economica,	nー1)も純粋競争の仮定により個人にとっては与えられるパラメー
Vol. 3 (N.S.) No. 11, pp. 257-80.	ターと考えることができる。以上の記号法によると、a番目の個人
	が所与の全資源をもって期間中の全消費をまかなうという事実は左
· _	の式によって表わされる。
G・S・ベッカーとW・J・バーモルは一九五二年迄のパティンキ我々はまず、古典理論の体系を簡単に理解することから出発する。	(1) $\sum_{i=1}^{n-1} p_i Z_{ia} = \sum_{i=1}^{n-1} p_i Z_{ia}$
ン論争の展望を行い次の如く述べている。「近年、多くの経済学者	1番目の固くこつ、こま。(a(7. 7
が古典派及びローザンヌ学派のメムバーと彼らの後継者達の貨幣理	してこの効用を極大ならしめようとする彼の行為は①の条件の下で (著目の介ノい)い」と、これの言語、「第一話」」、「シュオネーン
らの著者の凡てが『古典的体系』と呼ばれて きた 基本的 には 共通論に再燃せる関心を示した。これ迄に主張されてきたことは、これ	行われねばならないから、我々はラグランジ未定乗数法を用いて、
の見解を披瀝したということである」と。右の引用から理解される((註4)	(2) $u^{a} - \lambda_{a} \left(\sum_{i=1}^{n-1} \rho_{i} Z_{ia} - \sum_{i=1}^{n-1} p_{i} \overline{Z}_{ia}\right)$
ように我々は古典理論の解明に当って、個々の学者について一つ一	を極大ならしめる条件を求めることができる。即ち、
つとり上げる必要はない。論争の過程でその理論的構造を確定され	
た『古典的体系』を見ればよい。従って以下に展開される『古典的	(3) $u_j = \lambda_a p - (j = 1, 2, \dots, n-1)$
体系=とはかかる意味のものなのである。	ここで(n-1)番目の財をニューメレールとして用いれば、
理解を容易にするために(n-1)種の財が名目貨幣の媒介によっ	(4) $\frac{u_k^a}{2} = \frac{p_k}{p_k}$ $(k=1, 2, \dots, n-2)$
て交換される封鎖的純粋交換経済を想定し、名目貨幣をm番目の財	\mathfrak{t}_{-ud} \mathfrak{t}_{-un}

六四

一般均衡体系と貨幣理論	この段階において、価格は最早やパラメーターでなくなり、(9) X _i (<u>p1</u> , <u>p2</u> ,, <u>pn-1</u>)=0 (i=1,2,, なる市場の超過需要函数を導出できる。均衡においては各財	かくして a 番目の個人についての超遅需要函数は (7) $X_{ia} = Z_{ia} - \overline{Z}_{ia} = X_i \left(\frac{p_1}{p_{n-1}}, \frac{p_2}{p_{n-1}}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p_{n-1}} \right)$ となる。これを凡ての個人について集計して (8) $\sum_{a=1}^{m} X_{ia} = X_i \left(\frac{p_1}{p_{n-1}}, \frac{p_2}{p_{n-2}}, \dots, \frac{p_{n-2}}{p_{n-1}} \right)$ (i=1,2) (i=1,2)		(n-1) 個の方程式を与える。かくして我々は貨幣を除く凡ての財に (n-1) 個の方程式を与える。かくして我々は貨幣を除く凡ての財に (n-1) 個の未知数 $Z_{1a}, Z_{2a}, \dots, Z_{n-1a}$ を決定すべき (n-1) 個の方程式を与える。かくして我々は貨幣を除く凡ての財に
Ϋ́Б	たい 決 n-1) 注 ガ さ ガ 有 数 け 如 こ	(1) $M = kp_{n-1} \sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p_{n-1}} q_i \left(\frac{p_1}{p_{n-1}}, \frac{p_i}{p_n}\right)$ (1) $M = kp_{n-1} \sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p_{n-1}} q_i \left(\frac{p_1}{p_{n-1}}, \frac{p_i}{p_n}\right)$	L,2,,n-1) 格に変換するに必要な乗数因子、ここでは wを求めなければならい函数として決定 決定されない。貨幣価格を決定するためには相対価格を貨幣価い函数として決定 決定される。しかし今までのところ n 番目の財とした貨幣に対するである価格の比、 ならば残りの独立な (n-2) 個の方程式によって同数の相対価格が	除く凡ての財に 従っていまニューメレールとした(n-1)番目の財の方程式を落す 個であるが、ワルラスの法則によりそれらの中の一個は独立でない。 体系(9)の中に(n-2)個含まれている。これに対し方程式は(n-1) 体系(9)の中に(n-2)個含まれている。これに対し方程式は(n-1) なべき変数となる。しかしながら正確には価格といってもニューメ

る財の超過需要函数はあれ、価格決定とに二分され、価格決定過程はない。低格決定過程はない。	の需要として用いられる。の需要として用いられる。の需要は財の供給であって、こうしたるものであって、こうしたたのであって、こうしたたのであって、こうしたたのであって、こうしたたのであって、いるということで	るi番目の財の純供給量である。た Mに等しくなければならないという 経済全体としての貨幣需要を規定す 程式(1)は方程式体系(9)によって、知 程式(1)は方程式体系(9)によって、知 でかっ を決定するに十分である。 かく n-1)が決定されるのである。 がく が在量の関係として示されており、
る財の超過需要函数はただ相対価格にのみ依存しているから、もし幣価格決定とに二分されていることが理解できる。実物体系におけかれ、価格決定過程は実物体系での相対価格決定と貨幣体系での貨表わされる実物体系と方程式仰によって表わされる貨幣体系とに分し上見て来たところにより、古典理論の体系は方程式(9)によって(の需要として用いられる。の需要として用いられる。の需要として用いられる。そこで規定される貨幣の需給量は財のそれと同じく相対価格にのみ依存すの需要は財の供給であり前者の供給は後者の需要に外ならない。そに過ぎない。蓋し貨幣が交換の媒介という機能を演ずるために貨幣関係で示され得る。そこで規定される貨幣の需給は財の需給の反映示されているということである。尤も貨幣力権式といえとも洗量の	が在量の関係として示されており、他の財の方程式は流量の関係で n-1)が決定されるのである。ここで注意すべきは貨幣方程式のみ $p_n を決定するに十分である。ここで注意すべきは貨幣方程式のみ p_n を決定するに十分である。ここで注意すべきは貨幣方程式のみ p_n を決定するに十分である。ここで注意すべきは貨幣方程式のの p_n を決定するに十分である。ここで注意すべきは貨幣方程式のみ n-1)が決定されるのである。ここで注意すべきは貨幣方程式のみn-1)が決定されるのである。ここで注意すべきは貨幣方程式のみ(i=1,2,,n-1)が決定されるのである。ここで注意すべきは貨幣方程式のの本数因子であるに十分である。ここで注意すべきは貨幣方程式のの(i=1,2,,(i=1))が決定されるのである。ここで注意すべきは貨幣方程式の(i=1,2,,(i=1)))$

.

価水準を決定するために用いられる――にあっては、貨幣以外の財「貨幣数量説のヨリ発達した諸形態――そこでは貨幣方程式は物とができる。	我々はヒックスにも貨幣方程式についての同様な論述を見出すこ	であった。」(註5)(このながながです。(この))(注5)(この)))	程式――それは相対価格を絶対価格に変換する乗数因子を決定する	直接適用されたり比較されたりすることはできなかった。一つの方	しかくして得られた相対価格の体系は明らかに現実世界の諸結果に	心的なそして基本的な価格理論は貨幣理論から孤立していた。しか	ヨリ深い、ヨリ基本的な諸関係を隠蔽するからであった。それ故中	貨幣は単に除かるべきヴェールに過ぎなかった。何故ならば貨幣は	値は貨幣での偶然的価格とは無関係なものに思われたに違いない。	とメカニズムを分析する古典経済学者にとって、財・用役のこの価	である。価値の(一部分はまた固有の 『実質』 価値としての)本質	「全古典理論は均衡状態における物々交換経済の相対価格の理論	って剰すところなく示される。	しかない。このことは左のローゼンシュタインーロダンの言葉によ	正に既に決定せられた相対価格を貨幣価格に変換するためのもので	故古典的体系における貨幣方程式は貨幣価格を決定するというより	る。このことは貨幣価格の一義的集合がないというに等しい。それ	凡ての価格が比例的に変化するならば、財の需給量は全く不変であ	

六六

 (社も) J. R. Hiols: Value and Capitel, 2nd ed. 106. このの定体にはならない。そうして資格力量式は次につ参いの場合にも交換方程式以外ならない。そうして資格有効決定することは不可能である。かいて取おく、用数の価格と支すたのに加いしたたモニードノレールの (法・) L. Fieleer: 'The Purchasting Power of Money'' (法・) C. Fieleer: ''The Purchasting Power of Money'' ''''''''''''''''''''''''''''''''''					
(註6) J. R. Hicks: Value and Capital, 2nd ed. 1946. 安井・熊谷訳「価値と資本」ニ三八一三九頁。 (註6) J. R. Hicks: Value and Capital, 2nd ed. 1946. 安井・熊谷訳「価値と資本」ニ三八一三九頁。 (註7) L. Fisher: "The Purchasing Power of Money" 1911 金原・高城訳「貨幣の購買力」ニニ六頁。 (註8) K. Brunner: op. cit.; p. 153. = = = = = = = =	4) G. S. Becker & W. J. Baumol: op. cit.; p. 5) P. N. Rosenstein-Rodan: op. cit.; pp. 257 一般均衡体系と貨幣理論	■、ブルンナーは "補完的で、ブルンナーは "補完的として用いられていい。	るだけのものと認めるのである。とにかく、二分法を発展せしめたである。それ故にこそ貨幣方程式は、相対価格を貨幣価格に変換すなってなく、相対価格の決定のために用いられたニューメレールの独立でなく、相対価格の決定のために用いられたニューメレールのでなければならない。」	えれば、資幣の価値を央音するころと用、らてい。そうして貨幣方程式は次にこの補助的標準商品(古典派においては不熟ずある補助的標準商品(古典派においては不熟れを決定することは不可能である。かくて財おれども、ある標準を以て表わすのでなければ、れども、ある標準を以て表わすのでなければ、	**方程式はそれ
	、 と主張した。一方 ローゼンシュタイン-ロダイのためにのみ絶対的に必要なのであるということが行ったがであるということが行ったがになってあるということが行ったのにのの地判の中で「貨幣を保有することがたた不確実	こ	それなこご、目対西格と資産西格にですらこうの美女見て、「おいた」では、「「「「「「「「「「「「」」」」では、「「」」」」では、「」」」」」では、「」」」」」」」」」では、「」」」」」」」」」」	L. Fisher: "The Purchasing Power o 1911 金原・高城訳「貨幣の購買力」二二六 K. Brunner: op. cit.; p. 153.) J. R. Hicks:

	六八
(現金残高としての)は一般の予測が不確実なる限り、その限りに	せしめるであろう」、というのがマーゲットの主張である。 たしか(註13)
おいてのみ存在する」、という見解をとったのである。 その結果、(註1)	に人々が求められる支払に応じられないという事態を回避しようと
静学体系がいかに時間の仮定を含むように展開されようとも、そこ	望むならば、所得の受払の時間的不一致は人々をして貨幣準備を保
には不確実性が存しない故に貨幣需要はないと考えられ、そのこと	有せしめるであろう。従ってそうした時間的仮定を含めさえすれば、
は方程式(1)に照して当然均衡においては M=0 即ち貨幣の存在量も	静学体系の中で貨幣需要を扱うことも可能である。マーゲットの貨
0でなければならぬことを意味する。もしMが0でないとすれば均	幣需要の説明は時間的要因に重点が置かれているように思われる。
衡は成立しない。また、Mが0であるとすると、⑪式は pょ(i=1, 2,	J・C・ギルバートは貨幣需要を説明する要因として二つのものを
, n-1)のいかんにかかわらず成立してしまうために乗数因子を	挙げている。一つは時間であり他は不確実性である。そして静学的、
決定することは不可能となる。かかる貨幣方程式は全く無意味であ	あるいは静態的体系の中での貨幣需要を説明するのは前者であると
る。かくしてヒックスは、「最も狭い意味の貨幣理論は均衡理論の	なす。ギルバートの研究はマーゲットの論述の中から更に肝要なも
外に出るだろう」、と結論し、ローゼンシュタイン-ロダンは、「貨	のを抽出したといえるであろう。
幣の存在は静学均衡と両立しない」、という結論に達する。	一方、マーゲットの説明は完全な信用便益の欠如に強調点を置い
このようにヒックスとローゼンシュタイン-ロダンは、静学的貨幣	て見られる時、不完全信用組織説として知られる貨幣需要の説明と
経済が論理的に不可能であることを示し、その点から静学的仮定の	見做されるであろう。いずれにせよ今や不確実性の存しない理論体
上に組立てられた古典的実物体系の上に継合された補完的貨幣体系	系の中で貨幣需要が0でないと仮定し得る根拠は与えられた。
の理論を批判した。	しかしながら、貨幣需要が0でないことを更めて認めるならば、
しかしA.W・マーゲットはヒックスらの見解に対する反論を提	個人の需要の中に初めから貨幣――前章での議論をそのまま踏襲す
出した。マーゲットによれば不確実性だけが貨幣需要を惹起せしめ	れば、 n 番目の財――に対する需要も含められねばならない。また
る唯一の要因ではない。「万事、完全に予測される世界においてさ	経済における貨幣の存在量Mが0でないことを考えれば、その貨幣
え、所得の受領と支出との間の時間的一致の欠如は、受領額を見込	量は期首においては、いずれかの個人によって保有されているはず
んで貨幣を借入れたり、収支の間に経過する期間中貨幣を投資する	であるから、期首において個人の手中にある財の集合の中にも貨幣
ための完全な便益が存在しない限り、現金残高に対する必要を発生	を考慮することが必要となる。従って前章と同じ記号法を用いれば、

-

六八

		· · · · · ·	•		
一般均衡体系と貨幣理論	は不決定となる。(註1)に、それの一般での価格決定の手続きをとることができない。この場合価格ら市場での価格決定の手続きをとることができない。この場合価格らず、各財の無限量を消費することを意味する。従って彼の需要量	- の主体的均衡においては彼が市場で当面する価格のいかんにかかわのとなるということである。どの財についてもその有限量の限界効に式の意味するところは、主体の均衡においては各財の限界効用が(5) uj=0 (j=1,2,,n-1)	(12) $u^{a}(Z_{1a}, Z_{2a}, \dots, Z_{n-1a}) - \lambda_{a} \left(\sum_{i=1}^{n} p Z i_{ia} - \sum_{i=1}^{n} p i \overline{Z}_{ia}\right)$ であり、その極大化の条件は、 (13) $u_{j}^{a} = \lambda_{a} p j$ ($\dot{y} = 1, 2, \dots, n-1$) (14) $-\lambda_{a} p_{n} = 0$ $\lambda_{a} = 0$ (14) $-\lambda_{a} p_{n} = 0$ $\lambda_{a} = 0$	 (i) ∑ piZ_{ia} = ∑ piZ_{ia} (Z_{na}≥0, p_n=1) (ii) ∑ piZ_{ia} = ∑ piZ_{ia} (Z_{na}≥0, p_n=1) 	α番目の個人の収支均等式は古典的体系は以下の如く修正される。 (#16)
六九	ば、恒等的に貨幣需要は0でなければならぬことが知られた。そのに貨幣を導入した場合も諸価格が不決定となるごとを避けんとすれ以上によって古典的体系を修正して個人の収支均等の制約条件式(2) Zna==0 (ナベての pa となして既任)	(6)に代入して (2) μa=0 yna+0 (b) μa+0 yna=0 (c) μa=yna=0 この中闾と(0)の場合には、μa=0 を(0)に代入することによって(4)を この中闾と(0)の場合には、μa=0 を(0)に代入することによって(4)を (4)に代入して	$ \begin{array}{l} -\mu_{a}(Z_{na}-y_{na}^{2}) \\ (I) 0 極大条件は \\ (I9) u_{j}^{a} = \lambda_{a}p_{j} (j = 1, 2, \dots, n-1) \\ (I9) -\lambda_{a}p_{n} = \mu_{a} \\ (20) \mu_{a}y_{na} = 0 \\ (21) \mu_{a}y_{na} = 0 \end{array} $	(1) $u^{a}(Z_{1a}, Z_{2a}, \dots, Z_{n-1a}) - \lambda_{a} \left(\sum_{i=1}^{n} p_{i}Z_{ia} - \sum_{i=1}^{n} p_{i}\overline{Z}_{ia} \right)$ (1) $u^{a}(Z_{1a}, Z_{2a}, \dots, Z_{n-1a}) - \lambda_{a} \left(\sum_{i=1}^{n} p_{i}Z_{ia} - \sum_{i=1}^{n} p_{i}\overline{Z}_{ia} \right)$	の過程に陽表的に導入してみよう。 Zna≥0 は次の等式に書き換えここで仰式が陰伏的に含んでいる Zna≥0 なる条件を効用極大化

古典理論の基本的仮定の一つは名目貨幣からは何の直接的効用も	Development of an Economic Concept", Journal of
, <mark>P</mark>	拙ユ) J. C. Gilbert: "The Demand for Money: The
9	April 1935, p. 160.
いと思われる。	Walrasian System"; Journal of Political Economy,
従ってパティンキンの論理によっては古典的体系を拒否できな	(拙口) A. W. Marget: "The Monetary Aspects of the
ているが	(註2) P. N. Rosenstein-Rodan: op. cit.; p. 272.
右のパティンキンの推論では 8-8=const. の演算が行わ	s. 448.
	(註口) J. R. Hicks: "Gleichgewicht und Konjunktur"
従って Znu=-8 でなければならぬ。これは Znu≧0 なる条	(註1) P. N. Rosenstein-Rodan: op. cit.; p. 272.
2=1	s. 446.
$\infty + Z_{na} = \sum_{i=1}^{n-1} p_i \overline{Z}_{ia} + \overline{Z}_{na} (\text{const})$	(拙っ) J. R. Hicks:"Gleichgewicht und Konjunktur"
右の結果を収支均等式に代入して	
$Z_{ia} = +\infty$ (i=1, 2,, n-1)	できない。
による。	明によって支援されようとも、意味ある貨幣方程式を与えることは
(註17) パティンキンがこの点でなした議論は次の如き推論過程	るべきであろう。補完的貨幣理論は貨幣需要に対する時間要因の説
the Demand for Money" pp. 140-144.	って、貨幣経済の体系を叙述してはいないのだという点に求められ
(紺台) D. Patinkin: "Relative Prices, Say's Law and	体系が実は物々交換経済の体系の上に貨幣体系を継合せたものであ
杉浦一平 前掲論文 九六―一〇二頁。	は不決定となる原因はどこにあるであろうか。これはやはり古典的
の詳細な跡づけを行われた。	かわらず、古典的体系においてはそれを陽表的に考慮すると諸価格
として、ワルラス、ヴィクセルらについて、不完全信用組織説	なる。静学均衡においても貨幣需要があることを仮定し得るにもか
(註15) 杉浦一平氏は静態経済における貨幣需要を説明するもの	と全く同様に意味ある貨幣方程式を成立せしめないことが明らかと
Political Economy, April 1953, pp. 144–59.	結果市場の貨幣需要も恒等的に0であり、修正されざる古典的体系

.

. . .

.

.

七 ()

.

				•
『もし貨幣準備がなかったならば、その週の中の貨幣の流入と流	る。かくしてパティンキンは貨幣が効用函数に入ることが貨幣理論る。かくしてパティンキンは貨幣に効用を与えるいかなる仮定を設けたでは、パティンキンは期間中――彼はこの期間を過と呼んでの必要条件と考えたのである。	が成立つための 条件であることは 既に 明らかになっ たところでありでなく、経済に存在する貨幣量が同じくりでないことが貨幣理論は、貨幣に対する需要も恒等的にりとなることはない。貨幣需要がいことはたしかである。もし貨幣が効用を有すると仮定されるなら効用を持たぬ貨幣を保有するために、その資源を使用するものかな	?財を獲得し得る場合に、何日されないとするものの効用で	である。而して右の仮定に立てば当然貨幣は効用函数に入れられなては使用されるが、その他では経済的意味での財を表わさないもの引出されないということである。名目貨幣とは一般に支払手段とし
ここで wi はその i についての総和が1に等しい既知のウェイトここで wi はその i についての総和が1に等しい既知のウェイト	、 こ こ 、 た 、 また物価水準は左の如く定義する。 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	るのでなければならない。 あのでなければならない。 なのでなければならない。	準備すべき貨幣額は諸価格に依存しているからに外ならない。準備の流入・流出の間の時間的ズレが一定なる場合、そのズレのためになくて、実質価値で判断されなければならない。何となれば、貨幣	ところでこの貨幣準備が十分であるか否かは、その名目価値ではる保証こそ、貨幣準備に効用を賦与するものなのである。」へらしめるであろう。この種の金融的困難に対して貨幣準備が与えたらしめるであろう。この種の金融的困難に対して貨幣準備が与え

ば、回は	そこでα番目の個人の期首において保有する名目残高を Μ とすれぬの右辺の最終項の分子は、定義により名目残高を表わしている。	(2) $\sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p} Z_{ia} + Z_{na} = \sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p} \overline{Z}_{ia} + \frac{p\overline{Z}_{na}}{p}$	が得られる。ここで(30を p で除して変形し、	(28) $\frac{u_j a}{u_n a} = \frac{p_j}{p}$ $(j=1, 2, \dots, n-1)$	を得る。匈を匈で辺々除することにより、	(27) $u_n^{\alpha} = \lambda_{\alpha} p$	26) $u_j^a = \lambda_a p_j$ $(j = 1, 2, \dots, n-1)$	の極大条件として	$-\left(\sum_{i=1}^{n-1} p_i \overline{Z}_{ia} + p \overline{Z}_{na}\right)$	(25) $u^{a}(\mathbf{Z}_{1a},\dots,\mathbf{Z}_{na}) - \lambda_{a} \Big[\Big(\sum_{i=1}^{n} p_{i} \mathbf{Z}_{ia} + p \mathbf{Z}_{na} \Big) \Big]$	\int /n^{-1}	(\mathfrak{A}) $u^{a}(\mathbb{Z}_{1a},\mathbb{Z}_{2a},\dots,\mathbb{Z}_{n-1a},\mathbb{Z}_{na})$ やあるかい	右の条件の下で極大化さるべき効用函数は、	(23) $\sum_{i=1}^{n-1} p_i Z_{ia} + p Z_{na} = \sum_{i=1}^{n-1} p_i \overline{Z}_{ia} + p \overline{Z}_{na}$	かくして新しい記号法によるとα番目の個人の収支均等式は
形で書くことができる。ぬを整理して	α=1 ここでM=ΣMaである。勿論、我々は网のn番目の函数を異った	(4) $X_i = X_i \left(\frac{p_1}{p}, \frac{p_2}{p}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p}, \frac{M}{p}\right)$ $(i=1, 2, \dots, n)$, n−1; a=1, 2,, m)は一定とされているから、 蚴は左の	に影響しない変化だけに限定されているから、しかも Zia()=1,2,	ところで我々の現在の分析は Ma(a=1, 2,, m)の相対的大きさ	$\frac{M_m}{p}$ $(i=1,2,\ldots,n)$	(3) $X_i = \sum_{a=1}^m X_{ia} = X_i \left(\frac{p_1}{p}, \frac{p_2}{p}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p}, \frac{M_1}{p}, \frac{M_2}{p}, \dots \right)$	的を凡てのaについて集計して市場の超過需要函数を得る。	$(i=1, 2, \dots, n)$	(32) $X_{ta} = Z_{ta} - \overline{Z}_{ta} = X_{ta} \left(\frac{p_1}{p}, \frac{p_2}{p}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p}, \frac{M_a}{p}\right)$	これから超過需要函数を導いて	(a) $Z_{ia} = Z_{ia} \left(\frac{p_1}{p}, \frac{p_2}{p}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p}, \frac{M_a}{p}\right)$ $(i=1, 2, \dots, n)$	を決定し得る。その結果導出された需要函数は	に変えられる。。ことこのようの番目の個人の需要量 Zia, Z2a, …, Zna	$(0) \qquad \sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p} Z_{ia} + Z_{na} = \sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p} \overline{Z}_{ia} + \frac{M_a}{p}$

七二

		<i>B</i>	•		
	•		• • •	-	
				•	
3	前効 幣 う	+ 不数(88)	こ (37) 、	あな なる。 彩	(明) 寛 を 選
その	函効ブ	シハ茨をは	とく 38	(ST) るる が う	、凡
- +-	数 第 ル ン で 数 ナ	オイ性時らし、シート	なた X a 。 数 =		\mathbf{X}_{na}
一般均にブ	へ致ナるに「	てキ悩決に	方水门		$\mathbf{X}_{na} = \mathbf{Z}_{n}$
・ケーフ	も専にの入よ	起のさす立し体れるつ	程準ア	10 場 に の対	=Z _n -Z _{na} = - <u>ア t=1 p</u> X _t
糸 ン と ナ	るものと得	た系ること	程式の数は <u> <u> </u> <i>p</i></u> <i>x</i> <i>t</i>	、 の 対 す	X て ia t 集 =
般均衡体系と貨幣理論にめにブルンナーは収支	貨と貨幣と貨	幣含とがが理意もでわ	はす。	: 彼る	$a \subset O \cup \tau 集計して、= -\sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p} X_i$
些 型 収 論 支	をを幣関・型	キンに対して提起した貨幣理論成立パティンキンの体系の含意を検討不決定性に悩まされることもない。不決定性に悩まされることができる。これが、	ことになる。方程式の数は($n+1$) $ \bigotimes X_n = \sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p} X_i = 0 $	p ア	$\begin{array}{c} \mathcal{L} \\ \mathcal{L} \\ \mathcal{T} \\ $
均等	係 要 論 づ と を		○ 加 個 わ		(\mathbf{Z}_{t})
式の	けし構	ンに対して提起した貨幣理論成立の条件にパティンキンの体系の含意を検討する前に決定性に悩まされることもない。と同時に決定することができる。この体系は明らかに成立つことがわかる。それ故認	とって、	p M あ要	
外に	こなす	にに 糸 間 って は を	個となるが、	X_i $\left(\frac{p_1}{p}, \frac{p_2}{p}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p}, \frac{M}{p}\right) = 0$ ($i = c$ 実質残高に対する市場の超過需要函数を書	$\mathbf{\ddot{Z}_{ta}} =$
体系と貨幣理論	(#20)効用函数に入る も の と 貨幣を関係づけることによ っ て も 果され効用函数に入る も の と 貨幣を必要 と し な い。この目的は実際にう。ブルンナーによれば、貨幣理論を構成するためには必ずしも貨	い ル 無 洛 ン 矛 し	(/)	(37) X_t $\left(\frac{p_1}{p}, \frac{p_2}{p}, \dots, \frac{p_{n-1}}{p}, \frac{M}{p}\right) = 0$ ($i = 1, 2$) なる形で実質残高に対する市場の超過需要函数を書く	
利用	っのにてした	て テ 盾 て 考 ー で 我	か知成数		
度方	りはず	察してテ 、	立を決	と が ゴ	$\frac{p_{t}}{p} \mathbf{X}_{t}$
程 式	果 実 し	て 考察してみよ	()未知数を決定する	とが可能で ,n-1	
75	れに買	よ ン う 知	VI S		
	(41)	劾こ と	人味類	よでい 異	こでる
· .	(13) に 医 (43) に 医				
` uko	u_r^a	函 C N S S S S S S S S S S S S S S S S S S	Mi 首っして	にたマ、	こ S Na A A A A A A A A A A A A A
$u_k^{a+\lambda p_k}$	+ 大石 イン イン イン イン イン イン イン イン イン イン	は 2 60	$p_i Z$ 目 い k_a	れるシ目ろ堂ャ建	$= k_{a}$
% *	$Z_{2a},$		i a t と い ち	。数リ高	1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1, 1
· · ·	ll ur ^a +λapr(1+ka)=0(r≦s≦n−1) 医 u ^a (Z ₁ a, Z ₂ a, ·····, Z _n -1a)	用函数には貨幣が含まれないから、 田函数には貨幣が含まれないから、 用函数には貨幣が含まれないから、	(4) ♪! p _i Z _{ia} +Z _{na} = ♪! p _i Z _{ia} +Z _{na} の期首名目残高とすると、 いましつの制約条件式は、zを同じく a 番目の個に対してたで表わされる一定割合で貨幣を必ず保有するという意	うに解される。即ちa番目の個人は彼の他の個人からの財の購買決定される常数である。阏は第二章の仰と全く平行的関係にあるてのマーシャリアントともいうべきもので、経済的諸関係の外部なり、名目残高に対する需要である。またんはa番目の個人につ	こで s≤n−1, Zra−Zra>0 であり、Zaはバティンキンの場合とあるとする。貨幣利用度方程式は、あるとする。貨幣利用度方程式は、あるとする。貨幣利用度方程式は、
) Ⅲ 10 11 10 11 10 11 10 11 10 11 10 11 10	n_{tr}		番。とる目的な需	Z ^{ra} 度劲 方用
$=0 \ (k=s+1)$	· (r ¹ a)			のはい要価のなって	≥0 Tra で ¹ 花 板 式 大
ال من	NS 程 NS 社	ka \$	一 期 約 条 件 式 は	人二くある	あは化り
, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	n = 1	$\sum_{1}^{n} p_r($	+Z _n +Z _n	彼のも。	Z_{na}
E		Zra	え Zna 必	他とでたの全、ka	は の パ 制
· · · · · 1)	•	– Zro	を ず に 保	個 く 経 は 人 平 済 a	テ イ 条
-		1)	し 有 く す	か行的番 ら的諸目	シークト
• •			a る 番 と	の関関の財係個	Znaはパティシキンの場合と
•		· · ·	目 いの う	のにの人職あ外に	場 す 合、 べ
		· · · · ·	個,意	買る部つ	E e
		•	個,意	買る部っ	غ ک

(46) $\mathrm{D}i = \mathrm{D}i\left(\frac{p_1}{p_{n-1}}, \dots, \frac{p_{n-2}}{p_{n-1}}, \frac{\overline{Z}_n}{p_{n-1}}\right)$ $(i=1, 2, \dots, n-1)$	される均衡方程式体系は、を集計して貨幣の市場需要函数を得る。これらの結果をもって組織	行えば市場の純需給函数を得る。そして各個人の貨幣利用度方程式右のDとSを各財毎にすべてのaに対して集計して、番号の整理を	$D_{ra} = Z_{ra} - \overline{Z}_{ra} (r = 1, \dots, s \le n-1; Z_{ra} - \overline{Z}_{ra} > 0)$ $S_{ka} = \overline{Z}_{ka} - Z_{ka} (k = s+1, \dots, n-1; \overline{Z}_{ka} - Z_{ka} > 0)$	いま純需要と純供給を次の如く定義しよう。	トルの称呼で測られた相対価格と期首実質残高の函数の形で解出さ	(n-1)個の方程式体系を構成する。 それらの未知数はニューメレ	u).	$\frac{u^{a_{k}}}{u^{a_{n-1}}} = \frac{p_{k}}{p_{n-1}} \qquad (k = s+1, \dots, n-2)$	(45) $\frac{u_r^a}{u_{n-1}^a} = \frac{p_r}{p_{n-1}}(1+k_a)$ (r=1, 2,, s)	$(\!$	れる。	をニューメレールとして選ぶ。その結果、山と倒は次の如く変形さ	個の中の最初の≤個を構成する如く番号を付し、(n−1)番目の財を与える。ここにおいてα番目の個人が純需要を有する財が (n−1)	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
意味のない 貨幣方程書	のう。前三日間を開始する。前三日間を開始である。前三日日である。前三日日である。前三日日である。「「「」」である。「「」」では、「」」では、「」」では、「」」では、「」」のでは、「」」のでは、「」」の	している ために、貨幣特質である。しかるに	対価格を貨幣価格に変対価格を貨幣価格を貨幣価格を	は異った表現が用いら	高の実質価値に依存しう。両者の最も顕著な	ここでパティンキン	とができる。	ワルラス法則によって	- 2)個である。 従っ (4~50の方程式は(3)	(50) $\overline{Z}_n = Z_n$	$(49) \mathbf{Z}_{-} = \mathbf{K} \cdot \mathbf{n}_{}$	(48) $D_i = S_i$	(47) $\mathrm{S}i = \mathrm{S}i\left(\frac{p_1}{p_n}\right)$	

 $\sum_{i=1}^{n-1} \frac{p_i}{p_{n-1}} S_i$ 式を 用意するもので あることは 既に論証され しているということである。従って貨幣方程式 n-1)個であり、決定さるべき未知数は(3 n 幣方程式だけが 物価水準を 決定する のではな るずるためにだけ要請される貨幣方程式が持つ られているとしても、双方の貨幣方程式は全く 言は矛盾に巻込まれるか、そうでなければ全く こも均衡の一般組織から直ちに決定されるので 、ない。補完的性格は実物体系で決定された相 は共通点は財の需給量が相対価格と期首貨幣残 系だけで相対価格が決定されるのではない、 '落して、我々は矛盾なく未知数を決定するこ 財の需給量が期首貨幣残高の実質価値に依存 の体系とブルンナーの体系とを比較してみよ て48の中のニューメレールに関する方程式を p_{n-2} p_{n-1}

七四

 \mathbf{Z}_n

	· · · · · · · · · · · ·	·	``````````````````````````````````````		
(註13) D. Patinkin:" Relative Prices, Say's Law and 一般均衡体系と貨幣理論	のと考えられる。 幣存在量を与え、且つ有限な一義的貨幣価格の集合を決定し得るも、(#2) (#2)	が矛盾する命題を生み出すことなく、0ならざる貨幣在量と有限なでも財の需給量は変化してしまう。ブルンナーは貨幣体系の理論が次性の公準は自己を貫徹しない。凡ての貨幣価格が比例的に変化しる非たたい。 しょう ディンテレクセディ に	フ程式の決定する貨幣価格は、商品市場はならない。同次性の公準が自己を貫徹はならない。同次性の公準が自己を貫徹はならない。同次性の公準が自己を貫徹	っい 味 樫 笎 ン	/ 意 / 味 · の · あ
次性の公準が乗却されねばならない、而してこの公準の棄却は貨素はいかなる貨幣理論をも排除すること、貨幣理論成立のためには同		った貨幣体系の理論が陥入る論理的困難を明らかにし、結局この困これ迄我々は古典的一般的均衡体系に付加される補完的性格をも五	V Durance op. cit.; p B. Hickman: op. cit.; p	rois. p. 63. Brunner: op. cit.; pp. 167-71. Brunner: op. cit.; pp. 167-71.	Demand for Money", p. 136.

い貨幣保有を生み出すことを保証するための機械的しかけとしての
の付加的制約は、経済的な内容のない、彼の極大化の結果が0でな
していない。このことについて告げるものが出てくる迄ブルンナー
させるだけであって、この制約の起源なり経済的意味なりは何も示
「彼は我々を与えられた貨幣在高の利用に 関するある 制約 に当面
いる。
しながらパティンキンはブルンナーの方法を評して次の如くいって
れることが貨幣理論の必要条件であるという主張を撤回した。しか
パティンキンもこのことを認めて、後において貨幣を効用函数に入
が選択されれば、貨幣理論の成立のためにはそれで十分なのである。
件を設けるのも亦その中の一つである。そしてその中の一つの方法
その他にもいくつかの方法がある。ブルンナーの如く付加的制約条
は、貨幣を一般均衡体系へ導入する一つの方法であるに過ぎない。
十分条件なのだということである。貨幣を効用函数に導入すること
理論の必要条件と呼んだところのものは、実は必要条件ではなくて
最後に明らかにしておかねばならぬことは、パティンキンが貨幣
と呼んで差支えないであろう。
となった。その意味で我々はかかる貨幣理論を貨幣の一般均衡理論
しかもたしかに貨幣理論はその時、相対価格の理論と不可分のもの
次性の公準が破られてはじめて貨幣理論が成立することを知った。
を指摘した。果して貨幣理論の成立の条件を求めて来たところ、同
の理論をして相対価格の理論と不可分のものたらしめるということ

み考られるべきであろう。」 (註25) 的意味はあるにせよ、何故かかる制約条件を設けなければならない 過程に参加しているのと全く異っている。L・ミーゼスの表現によ れる。たとえ貨幣の限界効用という用語を使用するとしても、内容(#2)(#22)アンに従ってしを所得の限界効用と味ぶ方が適切であるように思わ らぬということである。このようにみてくるとP・A・サミュエル 位の限界効用は、主体の均衡にあっては凡てんに等しくなければな に導入する方法には、経済的意味が与えられている。その上、パテ れば、貨幣については客観的交換価値が与えられてこそ、主観的価 第二章(3)式におけるんの大いさで表わされる。(3)式を変形すれば、 の財の効用を表わすに過ぎない。かかる意味での貨幣の限界効用は る利点を有している。 インキンの方法は貨幣の効用を一般効用理論の枠組の中で論ぜしめ かを何一つ告げていない。その点、パティンキンの貨幣を効用函数 は価格決定過程の結果である。他の財の限界効用が逆に価格決定の は正に右の通りのものであり、そのような意味での貨幣の限界効用 となる。この式の経済的含意は各財に対して支出される最終貨幣単 という言葉が用いられるとしてもそれは貨幣と交換に獲得される他 て、貨幣そのものは何ら効用を有さないとされる故に〝貨幣の効用〟 たしかにブルンナーの場合、たとえ貨幣利用度方程式自体の経済 古典理論においてはその貨幣の効用に関する 基本的仮定 か ら し $\frac{u_1}{p_1} = \frac{u_2}{p_2} = \dots = \frac{u_{n-1}}{p_{n-1}} = \lambda_a$

七六

Credit", trans. H. E. Batson, New York, 1953, pp. 98.	的根拠を与えるものである。
(祖公) L. von Mises: "The Theory of Money and	の貨幣支出を増加させると考える現金残高接近の見解に対して理論
Analysis" Cambridge, Mass., 1947 p. 99.	人々はその保有現金の増加をみる時、他の事情にして等しければそ
	が等しくなるように配分し直すであろう。而してかかる論理こそ、
	に廻し、再び貨幣を支出する限界効用と貨幣を保有する限界効用と
(拙公) D. Patinkin: "The Invalidity of Ulassical	大きな限界効用が得られるように増加した貨幣の一部を財への支出
y Theory "	て小となる。よって当該個人が合理的行為をなすならば、彼はより
	限界効用は、他の財に対して支出される最終貨幣単位のそれに較べ
	界効用が逓減的と仮定すれば、同残高に加えられる最終貨幣単位の
福岡正夫 セイの法則と一般均衡理論一三田学会雑誌」第四一	ものが不変のまま彼の貨幣保有が増加したとしよう。実質残高の限
	なる。今α番目の個人が均衡にあるとして、何らかの原因から他の
Econometrics in Memory of Henry Schultz, 1942. pp.	──貨幣の固有の効用──とを全く同列において論ずることが可能と
Criticism", Studies in Mathematical Economics and	キンの方法に従えば、貨幣を支出する効用と貨幣を保有する効用―
g	の限界効用とが等しいということを示している。かくしてパティン
	る最終貨幣単位の限界効用と、貨幣残高に加えられる最終貨幣単位
て重要な問題を構成しているのである。	はa番目の個人にとって、彼が均衡にあるならば、各財に支出され
ぞれの接近の相対的有用性と経済的含意を明らかにする上で、極め	$= \frac{u_2}{m} = \dots = \frac{u_{n-1}}{m} =$
ばかりでなく、いかなる方法で導入を行うかということも亦、それ	用理論の外に置かれていた。しかし前章の匈及び効から得られる
以上の如くみてくると、貨幣を一般均衡体系へ導入すること自体	値が生まれるのである。かくの如く古典的取扱いによれば貨幣は効(鮭タタ)

般均衡大系と貨幣理論